



タイトル 野生のうたが聞こえる
原 題 A Sand County Almanac
著 者 Aldo Leopold (アルド・レオポルド)
訳 者 新島義昭 (にいじま よしあき)
出 版 社 講談社学術文庫
発 売 日 1997年10月10日
ページ数 370頁

ボランティアをやっていると、しばしば人の壁に阻まれる。以下は、筆者が所属するボランティア会報から採ってきたものである。

「今どきの自然保護

弥生三月、いよいよ春がやってくる。毎年のことながら雪の降る地域では、待ち遠しい季節であるとともに、うれしくなる季節である。いろんな所で春を探してみよう。生き物たちは、誰に教えられる訳でもなく春の訪れを察知して活動を開始する。生活している場所、環境が脅かされなければ毎年そこで出会うことができるのが自然だ。▼「自然が人質にされているみたいで…」とか「自然を人質にして…」という言葉が聞かれるようになった。お金がらみで、金勘定で動いている昨今の自然保護現場の揶揄である。私たちのようにボランティアで、無償で活動している者には縁遠いことではあるが、そのように感じることは多々ある今日の自然保護事情だ。▼反面、私たちのようにボランティアで、無償で活動している団体では、「信頼」「人間性」「感謝」がお金より大切だ。人とのつながり、信頼感のもとで活動は成り立っている。そして常にお互いに感謝して協働する。これがなくなった時には「金の切れ目が縁の切れ目」ところではない。「信頼の切れ目が縁の切れ目」、「もういいわ」と相手にされなくなる立場に追い込まれてしまう。人とのつながりの中で、これほど寂しいことはない。▼また、注意しなければならないのは「斧を持った口」にならないことだ。これは最近、あるテレビ番組でお寺の住職が話されていた言葉である。「人は口に斧を持って生まれてくる」のだそうだ。本人は何気なく、軽い気持ちで言っている中に、相手には斧を振り下ろされ、断ち割られたようにとられる場合があるのだという。そう言われれば、私の周りにも、そのような人がいる。弁舌爽やかでは済まない。言葉にも気をつけねばと思った春でもある」。

以上は、私たちボランティアのグループ会員みんなが共有する偽らざる気持ちである。

この文章を眺めながら、ふと 15、16 年前に読んだ「野生のうたが聞こえる」の第二部に収められている「山の身になって考える」を思い出し、「環境保全運動に関心を持つ人々のバイブル」とも言われる本書を本棚から取り出した。

著者アルド・レオポルド（以下レオポルド）が、人間中心的な自然保護から、生態学的・生物中心的な見方への回心」を劇的に表現したものとして知られている一節である。

偶然見かけたオオカミの姿めがけ、若き日の著者は何のためらいもなく引き金を引く。しかし、地に倒れた母オオカミに近寄った時、著者は死にゆくオオカミの瞳の中に新たな啓示を見出す。著者は以下のように語っている。

「母オオカミのそばに近寄ってみると、凶暴な緑色の炎が、両の目からちょうど消えかけたところだった。その時に僕が悟り、以後ずっと忘れられないことがある。それは、あの目の中には、ぼくには全く新しいもの、あのオオカミと山にしか分らないものが宿っているということだ。当時ぼくは若くて、やたらと引き金を引きたくて、うずうずしていた。オオカミの数が減ればそれだけシカの数が増えるはずだから、オオカミが絶滅すればそれこそハンターの天国になるぞ、と思っていた。しかし、その緑色の炎が消えたのを見て以来ぼくは、こんな考え方にはオオカミも山も賛成しないことを悟った」。

読んだ当初は自然保護に深く関わっていなかったこともあって、本書をここまで読んで、レオポルドの訴えたいことが理解できたわけではない。ただ、心臓が「ドキン」としたのを鮮明に覚えている。今でも「凶暴な緑色の炎が、両の目から消えかける……」光景は頭から離れない。本書を本棚から取り出したのも、その後、著者が何を訴えたかったのかを再確認したかったからである。

「凶暴な緑色の炎……」でレオポルトが言いたかったことは、「自分たちの都合しか考えない人間は、単純な足し引きに終始する浅知恵を越えた、いわば自然の摂理というものを知るべきである」そして、また「人間中心的な自然保護から、生物中心的な自然保護へと転換すべきである」と。

すなわち、「山の身になって考える」とは、自分の土地のオオカミを根絶やしにする牛飼いの批評や、「自然保護の美学」におけるシカの食害についての記述からもうかがわれるように、決して感傷的な動物愛護を説くものではなく、むしろ人間の目には非情とも映る弱肉強食も含め、総体としての自然を司る掟に目を向け、野生の声に耳を傾けよと言っているのである。

著者は、1887 年アイオワ州生まれで、野生生態学者、環境倫理学者であり、森林局の森林官さらにはウィスコンシン大学の教授を務めた。大学では狩猟鳥獣管理の講義を受け持ったが、この課程は彼の為に創設されたという。

本書は、3 部で構成されている。

第 I 部は、「砂土地方の四季 (A Sand County ALMANAC)」

ウィスコンシン州郊外の砂土地方の見捨てられた農場を買って掘立小屋を建て、毎週末家族ぐるみで通っては観察記録を続けた。この時の観察記録が第Ⅰ部の「砂土地方の四季」である。

第Ⅱ部は、「スケッチところどころ (Sketches Here and There)」

ここでは、彼の専門家としての生活とアメリカにおける自然保護運動にまで主題を展開している。

第Ⅲ部は、「結論 (The Upshot)」であるが、翻訳では、「自然保護を考える」となっている。随筆文は、知性と精神にあふれ、その文体は哲学的かつ倫理的である。と書くと、一般読者は「哲学的問題は勘弁して！」と付き合いにくいかも知れないと著者は危惧する。

さらにここは、4つの見出しで構成され、「自然保護の美学」「アメリカ文化における野生生物」「原生自然」と「土地倫理」である。ここでは、第Ⅰ部や第Ⅱ部で語られた著者の考えをさらに哲学的に展開している。

日本では、著者のレオポルドは「環境倫理学」の祖として知られているが、本書についての言及も、第Ⅲ部の「土地倫理 (Land Ethic)」に集中している。しかも、「土地倫理」という考え方は、あくまでも第Ⅰ部、第Ⅱ部で展開された豊かな自然体験と見聞の蓄積で熟成されてきたものであることが理解できる。

「土地倫理」とは聞きなれない言葉だが、レオポルドによれば、従来の倫理を成立させてきた唯一の前提条件は、「個人とは、相互に依存し合う諸部分からなる共同体の一員である」との認識に他ならず、「土地倫理」とはまさに「この共同体という概念の枠を、土壌、水、植物、動物」つまりこれらを総称した『土地』にまで拡大した場合の倫理」をさす。それと共に「土地倫理」は、「人という種の役割を、土地という共同体の征服者から、単なる一構成員、一市民へと変える」としている。

簡単に言ってしまうと、「個人と個人の関係であれ、個人と社会の関係であれ、これらは専ら人間と人間の間で成立する倫理であるのに対して、「土地倫理」における倫理とは、人間と人間以外の自然的存在者との間に要請される倫理なのだ」とレオポルドは主張する。

環境保全運動では日本の先輩格であるアメリカでも、ひところは「近視眼的な策しかとられていなかった」。というのも、つい「人間中心の考え方に囚われがちだ」ということの他に、では「真の対策を打ち出すにはどのような考え方に立脚すれば良いのか」が、当の運動を進めている人達にさえ良く判らなかつたという事情があつた。そこへ登場したのが本書であつたというわけである。

この種の本では説教臭さがただよるのが普通であるが、本書にはそれがほとんど感じられず、しみじみとしたエッセイとして読みごたえのある点が広く一般の人たちからも共感を得た原因だろう。

日本では、個々の環境保全活動が迷走しており、環境全体に悪影響を及ぼしている。人間の自分勝手な経済的観点だけに基づいた自然保護体制は、どうしようもなく偏ったものになっている。

「自然保護の現場を見ていない専門家(?)の意見で、方針が決められて良いのか」という問題もある。この問題については、「倫理」という視点が欠かせない。

自然を正しく知らなければ、また私たち人間が自然に対して何をしているかを知らなければ、私たちの将来は約束されない。そのためには、私たち自身も広い視野を持たなければならない。知りたがり屋の動物である人間は、知りたがりという特性を活かすことでしか、困難な未来を切り拓いてゆくことはできない。

レオポルドのいう「自然共生」という思想には、「人間の側から生態系を捉える」だけでなく、その背後に「生態系自体を中心として捉える」という思想が含まれている。

しかし疑問もないわけではない。たとえば、「どんな状態が生態系にとって健全なのか人間には認識できないではないか」とか「生態系の健全性が人間の健全性より優先されるのか」などである。

しかし、個人の幸福が追求される際に、生態系の健全性は不可欠であり、これを欠いた価値観は自らがよって立つ土台を食いつぶすような価値観でしかない。

自然はそして昆虫や鳥たちは、人類がいてもいなくても存続していくだろう。しかし、生物的存在としての人類は、自然が提供するサービスなしには一時(いつか)たりとも存続しえないのである。

生物多様性が注目されるようになったのは、環境変化に伴って身近な生き物の多くが個体数を減らし、また姿を消している様子を私たちが見て、「直観的に不安を感じた」ことが強く関わっているからだ。事実、私たちの調査フィールドでもこの不安は現実のものとなっている。

環境保全が、生態系の復元力を越えた大きさであったり、あるいはそれを維持するための人為的管理が不適切であったりすれば、生態系の劣化や破壊を引き起こすだけでなく、人間自身の存続基盤すら危うくする可能性があるのだ。

人間がもたらす変化の程度が緩やかなほど、生態系の安定性は保たれる。また、生態系の変化は穏やかに進行するが、その変化が顕著になった時にはすでに手遅れなのかも知れない。

本書は、環境保全運動の先駆的古典の名著である。出版は1997年と少し古いですが、含蓄のある文章に満ち溢れており、とくに環境保全に携わる人たちでまだ未読の人たちにはお薦めの書である。

2014.3.13